資料提供 令和7年10月6日

課 名:健康づくり推進課

担 当 者:武内内 線:3076

直通電話:082-513-3076

令和7年度広島県食育推進功労者表彰(知事表彰)の表彰式について

1 趣旨

本県の食育の推進に多大な御貢献があり、特に功労のあった方に対し、その功績をたたえるため、次のとおり表彰式を行います。

2 表彰日時

令和7年10月9日(木) 午後2時30分~午後3時00分

3 表彰場所

県庁 北館2階 第一応接室 (広島市中区基町10-52)

4 表彰者

山根副知事

5 被表彰者等

4名 (別紙のとおり)

- (1) 食生活等分野 (個人2)
- (2) 学校等教育分野 (個人1)
- (3)農林水産業分野 (団体1)

6 内容(表彰式次第)

- ・開会の辞
- ・表彰状の授与
- ・あいさつ
- ・閉会の辞
- 記念撮影

※すべて公開で行います。

令和7年度広島県食育推進功労者表彰 表彰者一覧 (分野別五十音順 敬称略)

1 食生活等分野(個人2)

区分	対象者	概要
個人	おかだ のりか 岡田 幾香 (69 歳)	<推薦元:福山市保健福祉局保健部健康推進課> 食生活改善推進員として、減塩、バランスのとれた食事、フレイル予防など食を通してこどもから高齢者まで地域の人たちの健康でよりなおぎ、推進している。
		の健康づくりを改善・推進している。 健康ふくやま21フェスティバルなど複数のイベントで試食 や献立を提供し、毎年幅広い世代へ食育啓発活動を行ってい る。
		地域の食材を使ったレシピ紹介、試食を行い、地産地消の啓発活動を行っているほか、次世代へつなぐ郷土料理を伝承するため、レシピ集作成に携わり、地域でも郷土料理の料理教室を行っている。
		金江学区で小学校児童対象にクリスマスケーキ作りを 2007 年 (平成 19 年) から行っており、全校生徒約 100 人の小学校にも 関わらず、毎年 60 人のこどもが参加し、大変好評で、食を通し てイベントを楽しむ機会となっている。
個人	やました ただこ 山下 忠子 (80 歳)	〈推薦元:江田島市福祉保健部保健医療課〉 食生活改善推進員として、ライフステージや地域特性に応じた事業を企画し、幅広く継続した活動を行っている。本市では人口減少や高齢化が進む中、年々活動回数と参加者は増加しており、本市の健康づくりのポピュレーション事業の一部を担っている。 生活習慣病予防では推定食塩摂取量の評価、フレイル予防では10品目調査などを行い、自身の食事を振り返る機会を創出してきた。調理実習を行うことで、家庭でも実践しやすい工夫を提案してきた。また、高齢化率が約46%と高い江田島市を危惧し、高齢者の栄養バランス面と誰もが好む料理をベースとした事業検討をして、カレー会の開催につなげた。この会は、外国人やファミリー層の参加にも広がり地域コミュニティ拡大にも寄与した。なお、今までアプローチができていなかった高齢男性に対し、男性料理教室を提案し開催につなげた。 市内3中学校で毎年郷土料理出前教室を主導しており、若い世代の食文化の継承、食の大切さや地域への愛着を育む活動に貢献してきた。
		南海トラフ巨大地震等の地震に対する備えとして、食料や飲料の備蓄が必要とされており、講習会等において食料のローリングストック及びポリ袋クッキングなどを紹介し、幅広い人への啓発活動を行っている。

2 学校等教育分野(個人1)

区分	対象者	概要
個人	対象者 いいだ のりひさ 飯田 典久 (64歳)	<推薦元:一般社団法人広島県医師会> 広島大学医学部を卒業後、マツダ病院、広島市立舟入市民病院の勤務を経て、平成 15 年 10 月に南区皆実町にいいだこどもクリニックを開設した。 小児科専門医としての知識や経験を活かし、自院の診療業務に加え、広島市立大河小学校学校医(平成 18 年4月から)、広島大学附属小学校学校医(平成 22 年4月から)、大河保育園園医(平成 27 年4月から)を務め、園や学校での食育活動に積極的に関わり、生徒の食育推進に寄与している。主に、南区内の公立小中学校養護教諭を対象とした講演会を毎年開催しており、食物アレルギー、肥満、成長をテーマに食育に関する講演を行い、食の大切さに関する啓発活動を継続している。 その他、平成 20 年2月に広島市南区医師会園医・学校医委員会の委員に就任、平成 26 年6月からは委員長を務めており、学校保健の向上や、学校生活における新型コロナウイルス
		感染症等の感染症拡大を防止する感染症対策活動に尽力している。

3 農林水産業分野(団体1)

区分	対象者 (年齢)	概要
;	有限会社トムミル クファーム (平成 10 年設立)	機要 <推薦元:広島県酪農業協同組合> 常に消費者交流を意識した行動を実施され、学校児童を始め、消費者に対し食育について語り続けてこられた。 平成10年の設立以降、学校の社会見学を年間5校以上受け入れている。平成23年~令和1年までは、宿泊施設で年間3,000~5,000人に、酪農教育ファームを活用した食育の学びを提供された。令和6年から、地域の他産業者と連携し農村を核とした食育や体験学習を提供しており、家畜伝染予防法に対応した体験受け入れは年間1,000人、牧場見学年間5,000人の実績がある。 活動の特色としては、一般社団法人Jミルクの推奨される「土日みるく」を伝える活動(給食のない休日は、おうちで牛乳を飲もう)のほか、牛と人類のつながりという歴史から家畜の価値観をひもとき、乳牛は母親である事、日々母乳を供給してくれ、休む事なく恵んでくれる事、土日や祭日もない事など、酪農において「食と命」を伝えられている。